

音読教材 新美南吉「手袋を買いに」

寒い冬が北方から、狐の親子の棲んでいる森へもやって来ました。

或軒洞穴から子供の狐が出ようとなりましたが、

「あつ」と叫んで眼を擦えながら母さん狐のところへころげて来ました。

「母ちゃん、眼に何か刺さった、ぬいて頂戴早く早く」と言いました。

母さん狐がびっくりして、あわてふためきながら、眼を抑えている子供の手を恐る恐るのけて見ましたが、何も刺さってはいませんでした。母さん狐は洞穴の入口から外へ出て始めてわけが解りました。昨夜のうちに、真白な雪がどつさり降ったのです。その雪の上からお陽さまがキラキラと照していたので、雪は眩しいほど反射していたのです。雪を知らなかった子供の狐は、あまり強い反射を受けたので、眼に何か刺さったと思ったのでした。

子供の狐は遊びに行きました。真綿のように柔かい雪の上を駆け廻ると、雪の粉が、しぶきのように飛び散って小さい虹がすつと映るのです。

すると突然、うしろで、

「どたどた、ざーっ」と物凄い音がして、パン粉のような粉雪が、ふわーっと子供狐におつかぶさつて来ました。子供狐はびっくりして、雪のなかにころがるよう

にして十米も向こうへ逃げました。何だろうと思つてふり返つて見ましたが何もいませんでした。それは樫の枝から雪がなだれ落ちたのでした。まだ枝と枝の間から白い絹糸のように雪がこぼれていました。

間もなく洞穴へ帰つて来た子狐は、

「お母ちゃん、お手々が冷たい、お手々がちんちんする」と言つて、濡れて牡丹色になった両手を母さん狐の前にさしました。母さん狐は、その手には——つと息をふっかけて、ぬくとい母さんの手でやんわり包んでやりながら、「もうすぐ暖くなるよ、雪をさわると、すぐ暖くなるもんだよ」といいましたが、かあい坊やの手に霜焼ができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行つて、坊やのお手々にあうような毛糸の手袋を買つてやろうと思ひました。

暗い暗い夜が風呂敷のような影をひろげて野原や森を包みにやつて来ましたが、雪はあまり白いので、包んでも包んでも白く浮びあがっていました。

親子の銀狐は洞穴から出ました。子供の方はお母さんのお臍の下へはいりこんで、そこからまんまるな眼をばちささせながら、あつちやこつちを見ながら歩いて行きました。

やがて、行手にぼつたりあかりが一つ見え始めました。それを子供の狐が見つけて、

「母ちゃん、お星さまは、あんな低いところにも落ちてるのねえ」とききました。

「あれはお星さまじゃないのよ」と言っつて、その時母さん狐の足はすくんでしまいました。

「あれは町の灯なんだよ」

その町の灯を見た時、母さん狐は、ある時町へお友達と出かけて行って、とんだめにあったことを思出しました。およしなさいつていうのもきかないで、お友達の狐が、或る家の家鴨を盗もうとしたので、お百姓に見つかって、さなぎ追いまくられて、命からがら逃げたことでした。

「母ちゃん何してんの、早く行こうよ」と子供の狐がお腹の下から言うのですが、母さん狐はどうしても足がすすまないのです。そこで、しかたがないので、坊やだけを一人で町まで行かせることになりました。

「坊やお手々を片方お出し」とお母さん狐がいました。その手を、母さん狐はしばらく握っている間に、可愛い人間の子供の手にしてしまいました。坊やの狐はその手をひろげたり握ったり、抓って見たり、嗅いで見たりしました。

「何だか変だな母ちゃん、これなあに？」と言っつて、雪あかりに、またその、人間の手に変えられてしまった自分の手をしげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかい坊や、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね、まず表に円いシャッポの看板のかかっている家を探すんだよ。それ

が見つかつたらね、トントンと戸を叩いて、今晚はつて言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸をあけるからね、その戸の隙間から、こつちの手、ほらこの人間の手をさし入れてね、この手にちようどいい手袋頂戴って言うんだよ、わかつたね、決して、こつちのお手々を出しちや駄目よ」と母さん狐は言いきかせました。

「どうして？」と坊やの狐はききかえました。

「人間はね、相手が狐だと解ると、手袋を売つてくれないんだよ、それどころか、掴まえて檻の中へ入れちゃうんだよ、人間つてほんとに怖いものなんだよ」「ふーん」

「決して、こつちの手を出しちやいけないよ、こつちの方、ほら人間の手の方をさしだすんだよ」と言つて、母さんの狐は、持つて来た二つの白鍔貨を、人間の手の方へ握らせてやりました。

子供の狐は、町の灯を目あてに、雪あかりの野原をよちよちやうて行きました。始めのうちは一つきりだった灯が二つになり三つになり、はては十にもふえました。狐の子供はそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや黄いのや青いのがあるんだなと思ひました。やがて町にはいりましたが通りの家々はもうみんな戸を閉めてしまつて、高い窓から暖かそうな光が、道の雪の上に落ちてゐるばかりでした。

けれど表の看板の上には大たいい小こさな電燈がともっていましたので、狐の
子は、それを見ながら、帽子屋を探して行きました。自転車の看板や、眼鏡の看板
やその他いろいろな看板が、あるものは、新しいペンキで画かれ、或るものは、
古い壁のようにはげていましたが、町に始めて出て来た子狐にはそれらのもの
がいったい何であるか分らないのでした。

とうとう帽子屋がみつかりました。お母さんが道々よく教えてくれた、黒い大
きなシルクハットの帽子の看板が、青い電燈に照されてかかっていました。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことごと音がしていました。戸が一寸ほどゴロ
リとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、
——お母さまが出しちやいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさ
しこんでしまいました。

「このお手々にちようどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思われました。狐の手です。狐の手が手袋を
くれと言うのです。これはきつと木の葉で買いに来たんだなと思われました。そ
こで、

「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにつけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、櫛から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言っただけ、もと来た道を帰り始めました。

「お母さんは、人間は恐ろしいものだって仰ったがちつとも恐ろしくないや。だって僕の手を見てもどうもしなかったもの」と思いました。けれど子狐はいったい人間なんてどんなものか見たいと思いました。

ある窓の下を通りかかると、人間の声が出ていました。何というやさしい、何という美しい、何と言うおっとりした声なのでしょう。

「ねむれ　ねむれ

母の胸に、

ねむれ　ねむれ

母の手に――」

子狐はその唼声は、きつと人間のお母さんの声にちがいないと思えました。だって、子狐が眠る時にも、やっぱり母さん狐は、あんなやさしい声でゆす

ぶっつけてくれるからです。

するとこんどは、子供の声がありました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子狐は寒い寒いつて啼いてるでしょうね」

すると母さんの声が、

「森の子狐もお母さん狐のお唄をきいて、洞穴の中で眠ろうとしているでしょうね。さあ坊やも早くねねしなさい。森の子狐と坊やとどっちが早くねんねするか、きつと坊やの方が早くねねしますよ」

それをきくと子狐は急にお母さんが恋しくなつて、お母さん狐の待っている方へ跳んで行きました。

お母さん狐は、心配しながら、坊やの狐の帰って来るのを、今か今かとふるえながら待っていましたので、坊やが来ると、暖い胸に抱きしめて泣きたいほどよろこびました。

二匹の狐は森の方へ帰って行きました。月が出たので、狐の毛なみが銀色に光り、その足あとには、コバルトの影がたまりました。

「母ちゃん、人間つてちつとも恐かないや」

「どうして？」

「坊、間違えてほんとうのお手々出しちゃったの。でも帽子屋さん、掴まえやしなかったもの。ちゃんとこんないい暖い手袋くれたもの」

と言つて手袋のはまった両手をパンパンやつて見せました。お母さん狐は、

「まあ！」とあきれましたが、「ほんとうに人間にんげんはいいものかしら。ほんとうに人間にんげんはいいものかしら」とつぶやきました。